

あるとき、うさぎが、山のように積まれたほし草をおいしそうに食べていました。一生けんめい食べているうちに、ほし草のくきで口のはしを切ってしまいました。

うさぎは腹を立てて、火のところへかけていつていいました。

「火よ、火よ。ほし草の山を燃やしてちょうだい」

火は、

「ほし草の山が、あんたになにか悪さをしたのかね」とききました。

「ほし草ったら、わたしの口を切ったの」と、うさぎはうったえました。火は、

「あんたがほし草の山を食べたんなら、ほし草だって、あんたの口を切ってもいいじゃないか」といいました。

「そんならいいわ。おぼえてらっしゃい」

うさぎはそう叫ぶと、水のところへかけていつていいました。

「水よ、水よ。火を消してちょうだい」

「火が、きみになにか悪さをしたのかね」

「ほし草の山を燃やしてくれないの」

「ほし草の山が、きみになにか悪さをしたのかね」

「ほし草ったら、私の口を切ったの」

「きみがほし草の山を食べたんなら、ほし草だって、きみの口を切ってもいいじゃないか」
うさぎは腹を立てて、水の精のおじいさんのところへかけていつていいました。

「水の精のおじいさん、水をぜんぶ飲みほしてちょうだい」

「水が、おまえさんになにか悪さをしたのかね」

「火を消してくれないの」

「火は、おまえさんになにか悪さをしたのかね」

「ほし草の山を燃やしてくれないの」

「ほし草の山は、おまえさんになにか悪さをしたのかね」

「ほし草ったら、わたしの口を切ったの」

「おまえさんがほし草の山を食べたんなら、ほし草だって、おまえさんの口を切ってもいいじゃないか」

うさぎは、またかけだしました。すると、弓をかついだふたりの男に会いました。

「弓つかいのおじさん。水の精のおじいさんを弓で射てちょうだい」

「水の精のおじいさんが、きみになにか悪さをしたのかね」

「水を飲みほしてくれないの」

「水は、きみになにか悪さをしたのかね」

「火を消してくれないの」

「火は、きみになにか悪さをしたのかね」

「ほし草の山を燃やしてくれないの」

「ほし草の山は、きみになにか悪さをしたのかね」

「ほし草ったら、わたしの口を切ったの」

「きみがほし草の山を食べたんなら、ほし草だって、きみの口を切ってもいいじゃないか」

「そんならいいわ。今に後悔こうかいさせてやるから」

うさぎはそうさけぶと、ますます腹を立てて、かけて行きました。すると、縫物ぬいものをしているふたりのおばさんに会いました。うさぎはそばへかけよって大声でいいました。

「おばさん、弓つかいのおじさんたちの、弓のつるを切ってちょうだい」

「弓つかいのおじさんたちが、あなたになにか悪さをしたの」

「水の精のおじいさんを弓で射てくれないの」

「水の精のおじいさんが、あなたになにか悪さをしたの」

「水を飲みほしてくれないの」

「水は、あなたになにか悪さをしたの」

「火を消してくれないの」

「火は、あなたになにか悪さをしたの」

「ほし草の山を燃やしてくれないの」

「ほし草の山は、あなたになにか悪さをしたの」

「ほし草ったら、わたしの口を切ったんだもの」

「あなたがほし草の山を食べたんなら、ほし草だって、あなたの口を切ってもいいじゃないの」

「そんならいいわ。いつかきつと、仕返ししてやるから」

うさぎは怒おこってさけぶと、またかけて行きました。すると、ねずみにあいました。

ねずみはうさぎを見るとびっくりして、穴の中に逃げこみました。うさぎは、ねずみにむかって大声でいいました。

「ねずみさん、どうしてかくれてしまったの。出てきて、縫物ぬいものしているおばさんたちの糸をかみ切ってちょうだい」

ねずみは、

「ぼくは、縫物しているおばさんたちと、けんかなんかしたくないね」といいました。すると、うさぎは、

「おばさんたちの糸をかみ切らないと、犬をつれて来るわよ」とさけびました。ねずみはとびあがって、いいました。

「わかったよ。犬なんかよばないでくれ。すぐ行く、すぐ行くよ」

ねずみは、縫物しているふたりのおばさんめがけて、かけだしました。

おばさんたちは、遠くからねずみが走ってくるのを見てびっくりしてさけびました。

「わかった、わかった。糸をかみ切らないでくれ。弓つかいたちの弓のつるを切りますから」

すると、ふたりの弓つかいがさけびました。

「わかった、わかった。弓のつるを切らないでくれ。水の精のおじいさんを弓で射るから」これを聞くと、水の精がさけびました。

「わかった、わかった。わしを殺さないでくれ。水をぜんぶ飲みほすから」

水がさけびました。

「ぼくを飲みほさないで。すぐに火を消すから」

火はあわててさけびました。

「ぼくを消さないで。ほし草の山をもやすから」

火は、そう思ったかと思うと、ほし草の山のほうへはっていき、火をつけました。

ほし草の山は、あつというまに、めらめらと燃えあがり、すっかり燃えて灰になつてしまいました。あとには、一本のほし草も残りませんでした。

原話…『世界のメルヒェン図書館12』小澤俊夫編訳ぎょうせい刊

再話…村上郁